

人間環境科学科・武田研究室

武田 尚子



1 本研究室のテーマ

私は2013年度に着任し、ちょうど満3年になろうとしている。まだ、研究室のゼミ生は3学年分しか指導しておらず、学部卒業生は1回しか出していないが、着任から現在までの研究室の状況をつづってみる。

私の講義科目は「人口社会学」「人口学」で、専門分野は社会学分野の「地域社会学、人口移動論」である。人口移動に着目しながら、「地域社会の変容プロセス」を質的調査方法を用いて分析する方法を研究室では指導している。具体的には、人口の流出・流入現象が、産業構造、地域社会構造、生活構造にどのような影響を及ぼしたかを解明する。また、そのような社会変容が近現代の日本人の社会関係や心性に与えた影響を探る。

2 ゼミ生の研究指導

質的調査（インタビュー、参与観察、資料収集）によって、地域社会に生じた社会現象の関係アクターを分類し、当該社会集団の特性を把握し、地域社会への理解を深める能力が向上するように学生の研究を指導している。

具体的には、祭礼、食物、住居など住民の社会的活動、文化的活動など扱いやすい切り口から、地域社会における生活環境の変化、ライフスタイルの変化を把握するようにアドバイスしている。インタビューの際に祭礼、空き家、再生された古民家、食べ物などは初めて会った人にも話を切り出しやすく、具体的な生活の様子がわかって、ライフスタイルの変化をたどりやすい。

このように地域社会研究と、ライフスタイル・生活文化研究の両面をうまく組み合わせて、学生の視野が広がるようなルートを作ることは重要と考えている。「食」の単語から最初は「ぐるなび」程度しか連想していなかった学生が、一緒に調査を重ねてゆくことによって、中山間地域や都市郊外団地の「フードデザート（食の砂漠）問題」に関心を持つようになり、空き家問題が深刻化している地域との共通性に気づいていくようになる。また、中山間地域で「食」の状況を聞き取るうちに、畑の収穫物の物々交換に気づき、「食」を通したネットワーク調査がうまくなる。ネットワーク分析の方法をいろいろと工夫するようになって、人々の絆のありように関心が広がる。地方活性化の手段の一つとして、「食」の活用が期待されることが多い現在だが、

表面的な「食」への興味ではなく、そこをブレイクスルーして、現代人なりの生活の深みや、社会構造の特徴を探る営為へと導いていくことを心がけている。

3 ゼミ生の卒業論文テーマと卒業後の進路

これまで卒論を執筆した学生の研究内容・卒業論文のテーマは、下記の4種類に分けることができる。

【都市における地域社会分析】

- ・池袋の再都市化と地域社会住民の対応
- ・世田谷区における地域共生の家と古書愛好者のネットワーク

【都市サブカルチャー系・文化集団】

- ・ヒップホップダンサーのライフストーリーとネットワーク
- ・郊外地域におけるゲームセンター愛好者と娯楽産業

【地域社会・地域産業】

- ・福井県の三国港における「あまちゃん」たちの生活戦略
- ・「道の駅」の多様化と十和田地域の農業におけるジェンダー関係
- ・新規就農者の都市郊外における参入ルート分析

【ネットワーク・集団分析とライフスタイル研究】

- ・マクロバイオ食品愛好者たちのネットワーク分析
- ・教員のライフストーリー分析

ゼミ生は首都圏出身者と地方出身者が約半々で、卒業後は出身県に戻って公務員になることを志望している学生も少なくない。そのため、現在、地域社会が直面している多様な状況を理解し、ねばり強く活動する人々の深い気持ちをすくいあげてゆくにはどうしたら良いかを考える機会が多くなるように心がけている。

ゼミ生の就職先は、男子は東北電力、武蔵野銀行、中国銀行、東京都保健医療公社、女子は東京都公務員（2名）、フジッコ（株）、メディアテクノロジージャパン、全国展開の流通産業・総合職などであった。

4 フィールドワーク実習のエピソード

本学着任以来、宿泊をとまなうフィールドワーク実習ではいつもリノベーションした古民家に泊まりこみ、当該地

研究室だより

域社会でインタビュー調査を実施してきた。実習で経験した印象に残るエピソードをいくつか紹介してみたい。

最初の夏、ゼミ生8名と2泊3日で調査に行ったのは、長野市から車で1時間の「おやき」で有名な長野県小川村だった。村の生活状況の聞き取り調査に行った私たちが宿泊したのは、地域おこし協力隊の「中尾さん」が古民家を自力でリノベーションしたゲストハウスだった。北アルプスの鹿島槍ヶ岳が望める大変美しい場所に建ち、敷地内には同族団の小さな社もあった。

ゼミ生のある班が、村内のかつての炭焼き集落に聞き取り調査に行った。いまは3戸しか住んでいない。その家のかたわらに個人所有の記念館があった。聞けば、祖父は明治期に、音楽教育の第一人者であった伊沢修二とともに、吃音矯正教育の楽石社を運営した人物という。祖父も吃音者で、むかしは吃音者が多かったという。消滅寸前の山のなかの集落から、伊沢修二の名前が出てくるとはよもや想像だにできなかった私は驚いて、翌年の実習で記念館を見に行った。そこは近代における吃音矯正教育の資料の宝の山だった。

ゼミ生たちは、地域おこし協力隊の「中尾さん」が同年代であるにも関わらず、中山間地域に入って、空き家改修を実現したことに大変興味をもった。聞けば、長野県は北海道とならんで地域おこし協力隊の先進県なのだという。翌年の秋、「中尾さん」の案内で、地域おこし協力隊の活動現場を複数訪問し、調査を実施した。その1カ月後、ゼミ生たちが報告書原稿を完成した頃、長野県白馬村に地震が起きた。震源地に近い小川村の揺れも大きく、「中尾さん」のゲストハウスは倒壊寸前となり、使用禁止になってしまった。築200年余の古民家を借りて、協力隊の任期に全力を投入してリノベーションをしたのに、任期修了1カ月前にすべてが無に帰した。自然災害の過酷さを予想しな

いかたちで私たちも実感した。ゼミ生たちが書いた報告書には、そんな現実には直面するとは予想だにせず、「中尾さん」の古民家のレポートが楽しそうに記され、「中尾さん」が続けるはずだったリノベーションの計画が夢のように綴られていた。この号は「中尾さん記念号」とした。

中尾さんと一緒に研究室のゼミ生が訪ねたなかに、小川村から戸隠連山を越えた先にある長野県小谷村の北小谷地域があった。ここの大綱集落にも古民家再生の宿泊施設があり、集落が運営している。指定管理者になっているのは、1ターンで定着した若い2家族である。ここに泊まって大変楽しかった私たちは、夏も再訪し集落調査を行った。

大綱集落から、さらに山のなかに入るとかつては横川という炭焼の村があり、いまは廃村になっている。今年度の夏の集落調査ではここも訪ねた。かつての住人に案内していただきながら、集落へ登ったが、草が生い茂って消滅した道をたどり、消滅した集落に足を踏み入れた。かつては7戸の炭焼の世帯が居住していたが、相互に親族関係はなかったという。長男だけが集落に残って家を継ぎ、次三男は他出する習慣だった。限られた戸数だけが生活可能な谷間の村である。親族関係も形成されない生活の過酷さがしのばれた。冬は雪に埋もれるこの地区では隣集落の分校に通うこともできず、雪中分室が設けられたという。先生一人、生徒数人の雪中分室にはオルガンもなく、音楽の時間は先生が吹くハーモニカの伴奏で、「異国の丘」をうたった。雪に閉じ込められた山深い集落、しんしんと降る雪のなかに響く子どもたちの「異国の丘」。

山深い廃村はすべてが濃い緑の世界である。道の脇に埋もれた供養塔を掘り起こして、据え直した。崩れた氏神神社の階段をそっと上がると、跡かたもなくなった社、そこには水がたまり、モリアオガエルの生息地になっていた。ゼミ生たちの感想は「ここはトトロの世界そのもの」だった。



沖縄県竹富島の種子取祭フィールドワーク：
八重山のと海とゼミ生



長野県小谷村フィールドワーク：
朝5時起きで田んぼの草取りをするゼミ生